# 戸川幸夫動物文学におけるアフリカ

## ――「人喰鉄道」「サバンナに生きる」を中心に――

阿部真人
（国語科教育研究室）

## 一　はじめに

戸川幸夫が初めてアフリカを訪れたのは、一九六六年（昭41）のことであった。それ以来、アフリカの魅力にとりつかれた戸川は何度もアフリカへの旅を続け、アフリカを舞台とした数多くの作品を書いた。アフリカは戸川にとって一体何であったのか。アフリカによって戸川は何を表現しようとしたのであろうか。本稿では、「人喰鉄道」「サバンナに生きる」の二作品を中心に、この問題についての考察を試みたい。

二作品の成立は次の通りである。

(一)「人喰鉄道」

〈初出誌〉一九六七年（昭42）十一月～一九六八年（昭43）十月
「サンデー毎日」に連載

〈初出本〉一九六八年（昭43）十月　毎日新聞社発行

(二)「サバンナに生きる」

〈初出誌〉「小説新潮」に連載。原題は「G夫人のアフリカ物語」であった。以下はその発表時である。

第一話「ゴロンゴロの火口原で」一九八一年（昭56）七月号
第二話「巨象の葬列」一九八三年（昭58）一月号
第三話「パー爺さん月下に死す」一九八二年（昭57）二月号
第四話「共喰い」一九八二年（昭57）七月号

〈初出本〉一九八四年（昭59）十月　新潮社発行

「人喰鉄道」は、ウガンダ鉄道の建設に命を賭けるパターソンの知恵の、勇気の、そして愛の物語である。なかでも、二百人以上の人間を食い殺した人喰ライオンとの戦いは壮絶を極めた。劇的要素の濃い小説で、アフリカ体験後のこの種の作品としては唯一の長編であり、完成度も高い。これに対して「サバンナに生きる」は、観察記録的要素の濃い小説である。「私」がG夫人の指導のもとに、次々と野生動物について新しい発見をしていくという、ノンフィクション的スタイルをとっている。すでに発表された四つの話をストーリーの年代順に再構成し、この種の作品としてはまとまったものとして異彩を放っている。「人喰鉄道」と「サバンナに生きる」は、対照的な作品といえよう。

阿部真人

## 二　「人喰鉄道」についての考察

**［作品の梗概］**

一八九六年夏から始まったウガンダ鉄道建設工事は、モンバサを起点として、二年後にはサボ河畔にまで達していた。そうした折、インド人隊商ダルカンスによって重傷を負わされた黒鬣の雄ライオンが人喰いに変身する。人喰いは十数頭にまでふくれあがった。親友ハルスレン所長の招きでやって来たパターソンは、到着したその日彼の遺骸と対面した。犯人は〝欠け耳〟であった。ハルスレンの妹ミッシェル（パターソンの恋人）は、看護婦として現地に残ることになる。

新所長ブルックを中心に人喰いの対策に頭を悩ませている最中、コレラが発生した。防疫班の処置を巡ってマサイ族と一触即発の危機となったが、パタソーンの決死の行動で誤解はとけた。

ブルック所長が人喰いのために負傷し、パタソーンは三代目所長に任じられた。ダルカンスと土工頭カリムバックスの企みで暴動が勃発したが、マサイ族や軍隊の応援を得て鎮圧出来た。しかし人喰いの跳梁は衰えず、〝黒鬣〟のためにプロハンターのギルホードは重傷を負い、看護婦のビスケもミッシェルをかばって犠牲となった。ブータの妻ムティトとその弟フィンが基地にやって来る。

ライオン禍に対抗して軍隊の出動を要請したが、その無能ぶりをさらけ出しただけで引き上げて行った。釈放されたダルカンスの情報で〝黒鬣〟を追いつめたパターソンは、突如現れた巨象の群れの暴発によって負傷した。一方、ダルカンスは〝黒鬣〟の復讐を受けて死ぬ。

パターソンは〝三本指〟〝欠け耳〟の二頭を射殺することに成功したが、リーダー格の〝黒鬣〟によってブータを失う。意気消沈したパタソーンの身を慮ったビヤード医師たちの進言で、パターソンはナイロビ支部長に任じられ、ミッシェルもナイロビの病院へ転勤となった。結婚式を挙げた二人のもとに〝黒鬣〟による被害情報がもたらされた。意を決したパターソンは本部長の許可を得て、フィンと二人でサバンナに〝黒鬣〟を追い、遂に仕留めることに成功した。

ウガンダ鉄道の第一期工事はそれから半月後に完成し、受難碑の除幕式と共に、開通式が華々しく挙行された。

### ㈠　パターソンの人間愛

インドの鉄道会社で働いていたパターソンは、工事責任者ハルスレン所長の招きに応じて、東アフリカに第一歩を印す。

若きエンジニアJ・L・パターソンの乗ったインド汽船が、美しいマキュパ海峡を通って、モンバサの港に入港したのは午後を少しまわった時刻であった。

パターソンはデッキにもたれて移りゆく岸の景色をながめていた。（中略）

パターソンはインドではチーフ・エンジニアとして重く扱われていた。背が高くて痩せてはいたが、むだな脂肪のない、いかにもスポーツマンらしい青年で、インド奥地での鉄道建設でさんざん苦労してきたので、未開地の鉄道づくりの技術については自信をもっていた。彼は暗黒大陸といわれるアフリカの東部に最初のレールを敷いてゆく任務に大きな喜びを感じていた。自分の手で創りあげてゆく鉄路が、これまでむくわれずにいたアフリカの人々にどれだけの光明を与えてゆくだろう……世界の文明がやがて自分が敷いたレールの上を走って奥地へ滲透してゆくにちがいない。そしてアフリカに光明が訪れるのだ、と思うと誇らしい生甲斐を感じるのだった。

（一七・一八頁）

文明論者パターソンの登場であるが、作者自身も「暗黒大陸といわれるアフリカに文明の曙光を投げかけんとするウガンダ鉄道の建設だった。」（五頁）と書いている。作者はパターソンに同化しながら、その思いを表現していっていると見ることが出来よう。

文明によってアフリカの人々に光明を与えようと願うパターソンは、当然のことながら人道主義的人間愛に裏打ちされた人物として描かれている。その愛は多くの工事関係者に及んでいくが、なかでもアフリカ原住民のマサイ族ブータへの愛は顕著であった。毒殺や挟み罠による人喰ライオンとの戦いの最中に、突如として死亡率八〇パーセントといわれるコレラが、サボ河畔上流において猖獗を極めた時のことである。パターソンを責任者とする防疫班は、全滅したマサイの部落と死体を次々と焼却して歩いた。その帰途、衣服をはぎとられていた一人の男を見つけた。マサイの密猟者ブータであった。まだ生命の残滓が残っているのを見て、キクユ族の娘ビスケと共に看護婦として働いていたミッシェルがその命を救うことを願う。ミッシェルはブータを基地まで連れて行くことを主張する。会社の人間としてそんな危険は冒せないというビヤード医師、残虐なマサイ族しかも密猟者だから放っておけばよいという黒人の従者たちに対し、ミッシェルは激しく迫る。

「密猟者であろうと、マサイであろうと人間の生命に違いはありません。

医学にたずさわる者として……いいえ、医学でなくとも、人間として、生命のある者を、猛獣がうろうろするところに置いてはいけないと思います。

先生、基地につれていっていけないのなら馬で通える距離のところにキャンプを一つ造ってもらって下さい。わたくしが看病します……」（五三頁）

そしてパターソンも、

「私は、この男を連れていって手当てを加えてやるべきだと思います。白人であれ、黒人であれ、また正常な者であれ、犯罪者であれ、生命の尊さには変わりがないというミッシェル嬢の言葉が正しいと思います」（五三頁）

と口を添える。パターソンのそれは、ミッシェルへの愛が影響しているとも思われるが、いずれにしてもパターソンはビヤード医師の反対を押し切って、行き倒れのコレラ患者ブータを連れ帰る。

伝染の恐れのあるコレラ患者を、たとえ隔離病棟にしろ基地へ連れ帰ったという事は、パターソンに対する非難を集中させた。ミッシェルの看護ぶりと隔離病棟を人喰ライオンから守ろうとするパターソンの防衛協力ぶりが、ビスケの口から人々に伝えられた。労働者たちは、「自分たちと同じ黒い皮膚をもった人間が、白い皮膚の人間から真剣に守られ、真剣に看護され、真剣に治療され、悪魔の呪いから解き放されつつある」（五五頁）という事実を知り、感動した。

パターソンの黒人ブータへの人間愛は、ミッシェルに触発されて発現されていったが、ミッシェルの影響はそれだけにとどまらなかった。新たに運び込まれたコレラ患者十二人を人喰ライオンから守るために、ブータがパターソンの助手をしたいと申し出た時のことであった。ビヤード医師やブルック所長は、マサイといえばライオンと格闘できる種族だし、コレラ菌に対しても免疫性になっているから見張りをさせるのにはもってこいの人間だと考えた。しかし、パターソンは「密猟者をそんなことに使うとは」としぶった。生命の危機の前には白人も黒人も正常な者も犯罪者もなかったが、その危機の去った今では話は別であり、正義感からのためらいがあった。これに対してミッシェルはいう。「ブータはもう密猟者ではないわ。彼の過去に、どんな暗い翳があったか知り

ませんけど、古いブータはここに入院したときに死んだのよ。いまいるのは新しいブータです。いまのブータは何か役に立つことがしたいのよ。これから彼の治療をするのは、ジョニイ、あなたなのよ……」（五九頁）ブータがこれまで白人によって受けてきた心の傷の深いことを察し、その治療のために時間をかけることを勧めるのであった。

このミッシェルの助言はパターソンの心に通じる。コレラ防疫のために部落や草原を焼かれ、激昂したマサイ族が白人共の皆殺しを叫んで、大酋長レナナのもとに集結しているとの情報が入った。パターソンが釈明と和解のためにレナナに会いに単身赴こうとして、ブルック所長に激しく拒絶された直後のことであった。熟考の末、工事責任者の一人として決行するしかないと秘かに決意したパターソンは、無駄死にすることなくレナナに会うためには、ブータに聞くしかないと思う。

パターソンから、大酋長レナナに確実に会うにはどうしたらいいだろう、と相談をもちかけられたとき、ブータは眼を大きく見開いてパターソンを見た。

いつもむっつりしていて、ほとんど笑顔を見せない彼は、パターソンの質問には答えず、

「会って……どうする？」

と問い返した。英語がうまく喋れないのでそれがひどくぶっきらぼうに聞こえた。

「いや……」

なんでもないんだ……と言おうとしてパターソンはその言葉を慌てて呑みこんだ。

「ブータのねじけた気持を治療するのは、これからはジョニイ、あなたなのよ……」

と言ったミッシェルの言葉を思いだしたからだった。ブータはじいっと射貫くような眼で見つめている。パターソンはいまこの男に嘘をついてはいけない、と考えた。

「これは君だけに話すのだから、そのつもりで相談にのってもらいたい」

パターソンは正直に自分の考えをうちあけた。（六六・六七頁）

ブータの表情に柔らかみが加わった。自分が同行しようと言い出したが、そのときパターソンはふと不安が生じた。

この男は密猟者なのだ。密猟者といえば聞こえはいいが早くいえば一種の盗賊ではないか。イギリスでは下等な犯罪者なのだ。マサイの社会ではどうなのか知らないが、恐らく同じではなかろうか？とするとこの男を連れてゆくことでかえってマイナスになるのではなかろうか……？

そうしたパターソンのとまどいをブータは動物的な本能で敏感に嗅ぎとったらしく、

「だいじょうぶ。しんぱいない。レナナ、わしおとうさん、仲よしネ」

にッと白い歯を見せた。彼がパターソンに見せた最初の笑いであった。（六七頁）

パターソンの信頼にこたえて、ブータは彼をレナナのもとに導く。槍の触れ合う殺気立った戦士たちの前で、ブータはパターソンを弁護して、賢明に、マサイのコレラ患者に対するパターソン達の愛を説く。こうしてレナナの理解を得るのに成功したのであったが、この決死行を共にして——道中ブータの行動にしばしば不信の念を抱いたパターソンではあったが——、二人の間は堅く結ばれ、ブータはパターソンを助けるために再び基地に戻ることになる。

基地に帰ったブータは、パターソンを助けてさまざまな難事に立ち向かうが、人喰ライオンの跳梁は激しさを増すばかりであった。意を決し

たパターソンは軍隊出動を要請した。モーリス大尉に率いられて一個中隊が到着したが、無能ぶりを発揮するばかりであった。その間にも毎夜のように兵士や労働者が襲われた。セタニ（悪霊）説が再燃し、帰国を申し出ていたインド人労働者たちを押えることも出来そうにない情勢になった。

頭をかかえこんでいたモーリス大尉とパターソンの前に、思いつめた表情のブータが訪れ、自分が囮になりたいと申し出た。人とライオンとの間に仕切りをもうけた檻の中に自分と妻のムティトが入り、ライオンが飛び込んできたら檻の落し戸に連結したロープを引くというものであった。うまくいきそうな案だが、尊い人命を囮として使用することに反対するパターソンに、ブータは更に言う。「パターソンさんに生命たすけられた。パターソンさん苦しむ、だまって見ていられない。だいじょうぶ。わし檻に入る。わし、昔、ライオンと戦って勝ったこともある。心配ない……」（二〇九頁）ブータとモーリス大尉の二人に説得されて、パターソンは仕方なく折れた。

夕方から、ブータとムティトは檻の中へ入った。アフリカの荒野の暗闇の中でムティトの歌う「ムガイの星の歌」が嫋々と流れていく。ライオンをおびき寄せようと必死になっている夫婦の気持は痛いほどパターソンの胸に伝わり、一言も発することが出来ない。待機していた兵士をはじめ各人各様の思いにふけっていた時、その歌声がはたと止み、落し戸の落ちる音とライオンの怒号とが同時に起こった。脱出しようと荒れ狂うライオンのものすごい音に、狼狽した兵士たちは射撃を始める。必死に制止するパターソンの声は、激しくなっていく銃声に消されていく。パターソンは決意し、檻に向かって走りながら、戸を開けることをブータに命じる。魂を消しとばしたように震えているムティトと、彼女をしっかり抱きしめているブータの安全をパターソンが確認した時であった。モーリス大尉が走ってきて、「何の権限でライオンを逃したのか」と怒気をこめて迫った。

「これは権限とか、何だとか言う問題じゃないんです。ごらんなさい。この檻に無数につけられた弾痕を……中には二人の人間がいたのですぞ。

いかに狼狽したとはいえひどすぎます。幸いにしてブータ夫婦に命中しなかったからよかったが、もし重傷でも負わせていたらどうします？」

「人喰いを退治するために囮となったのだから多少の危険はやむを得ん」

「これが多少の危険だと言うんですか？数十発の……いや数百発かもしれない弾丸雨飛の中にさらされた者の生命を多少の危険だと言われるのですか？

冗談じゃあない。大尉はライオンを仕とめれば任務を果たしたことになりましょうが、部下を射殺された私の立場はどうなります？

あなたはライオン、ライオンと言うが、ライオンと人命がひき替えにならないことぐらいはお解りでしょう。

部下の命を危険にさらすぐらいならむしろ私は人喰ライオンを逃がします。

ブータに檻の戸を開くように命じたのは私です。だから、そこに問題があるというのなら責任をもちましょう。

しかし、あの場合、ライオンを逃がさなければ、あなたの部下はもっと盲うちを続けたでしょうし、乱射乱撃されていれば命中弾もありましょうし……落ちついて檻に近よれば一発で仕留められるものを……」

「軍に対する重大な侮辱じゃッ！」

とモーリス大尉はがなり立てた。（二一四頁）

このパターソンとモーリス大尉の言動には、白人による黒人観の典型的な違いが見られる。パターソンとブータは互いに相手を思いやり、ますます心が結ばれていく。

軍隊が引き上げた後、ミッシェルの提案に示唆を得て、三本指・欠け耳の二頭を射殺することに成功したパターソンであったが、リーダー格の黒鬣は健在で、白昼集団で働いている人々をも襲うようになった。パターソンは徹底的に狩りをしようと決意する。二日目の夕方、遂に雌雄を決する時がきた。が、狡猾な黒鬣のために不意を突かれたパターソンは窮地に陥入る。踊り出たブータは短剣一つで黒鬣に抱きついていく。すさまじい格闘の末、黒鬣は傷ついて脱出し、ブータは重傷を負い、病院に運ばれたが二週間目にその英雄的生涯を終えた。その時のパターソンの様子を、「親友ハルスレンが死んだときには涙を見せなかったパターソンも、こんどは涙をいっぱいためてブータの妻ムティトの肩を抱き、『必ず仇をとる！』と誓うのだった。」（二七〇頁）と作者は書いている。更に続けて、パターソンの心境を次のようにもしるしている。

ブータの死で、パターソンの心にぽっかりと空虚な穴があいてしまった。

鉄道建設という大きな仕事の現場を指導監督する責任者が、こんなことではならないと思ってみても、快々として楽しめない日が続く——。

パターソンがブータと実際につき合った年月は決して長いものではなかった。だが、パターソンの心の中を占めるブータの俤は大きいのだ。それはブータが、パターソンに捧げた誠意からきたものだろう。白人と黒人という境を越えて、二人の間には強い信頼と友情が結ばれていたのだった。

ひとりになると、パターソンはよくブータの思い出にふけった。

コレラで死にかかっていたブータとの出会い。基地の反対を押し切っての病院への収容。ブータの反抗。そして協力。部落を焼かれて殺気立っているマサイ部落への潜入。ブータの必死の弁護。見張り。イナゴの大群の襲来を予知したブータ。泥流との闘い。暴動に示したブータの勇気。数々のライオン狩り。豹を待った夜。最後の、黒鬣との死闘……そうした思い出が鮮烈な印象でよみがえってくるのだ。（二七〇頁）

約二ヶ月後、ムティトへの誓いをはたすべく、パターソンはフィン一人を伴って、サバンナに黒鬣を追った。できればフィンに兄の仇を討たせてやりたい気持からであった。六日目の夕暮れ、遂にその目的をはたすことができた。「兄さんッ！仇を討ったぞおーッ」（二八一頁）——涙で洗う顔を落陽に向けるフィンの叫びに、パターソンのブータへの愛の完結をみる。

パターソンとブータとの信頼関係は、最初から成立していたのではなかった。パターソンは持ち前のヒューマニズムからブータの命を救い、その看病に力を尽くしたが、彼を心の底から信頼していた訳ではない。密猟者への不信感が事あるごとに頭をもたげるのであった。ブータのほうはもっとひどく、白人から虐げられた過去がそうさせるのか、ミッシェルやパターソンに対する疑惑の念を容易に拭い去ることは出来なかった。その上、両者には宗教による根本的な違いもあった。にも拘らず、二人はお互いの誠意の上に信頼感を築きあげ、白人黒人の垣根を越えた強い愛に結ばれていったのである。

以上見てきたようにパターソンの人間愛は、人種の差別を越えた愛にまで高められている。しかし、それは十九世紀末のイギリス植民地政策の枠内のものであったことはいうまでもない。パターソンには「二つの

顔」があった。一つは、当時のイギリス本国が東アフリカの諸民族の統一、独立への意識に芽生えることを恐れて、異なる種族が対立するように仕向けたのに対して、それを認めなかったことである。鉄道を建設するためには、マサイやキクユ、その他の種族たちの融和を計ることが必要であった。他の一つは、インド人隊商ダルカンスの商売を黙認したことであった。ダルカンスのもたらすものには、売春婦や地酒のほか、法律で禁じられている奴隷もあった。「どんな社会にも必要悪というものはある。ましてここのような荒々しい野性の世界では、修身道徳だけを説いても駄目」（一四〇頁）というハルスレン所長以来の方針を踏襲してきた。

パターソンは所長に就任して以来、この矛盾した「二つの顔」を持たなければならないことに自らを責めた。が、彼の苦悩はそれだけにとどまらなかった。

一頭のライオンも射殺出来ずに軍隊が引き上げていった後、監督のスプーナー以下多くのインド人たちが帰国を申し出てきた。「たとえ銃で脅しても彼らを帰すわけにはいきませんよ」と激烈な口調で決意を促すホワイトヘッドに、パターソンは労働者たちの宿舎をプチュマまで後退させ、汽車で人夫だけ朝夕送り迎えすることを提案する。しかし、やってきた本部のオハラ次長から、意外にも暴動の指導者ダルカンスの起用を勧められる。

「いまのところここへ送りこむ労働者を掻き集められる人間は、奴をおいて他にないのだ。

毒も使い様では薬になる。彼に人夫を集めさせ、見張りを命ずる。逃亡者が出たら彼の責任ということにするのだ。とにかくそうして工事を進めながら、君はライオンの駆逐に専念してもらいたい。

このことは本部長も了解されているのだから、解ってもらいたい」

パターソンは憤りをごくりと呑みこんだ。本部長も承知したのだ――といわれた以上、もはや何を言っても無駄だ。

「よろしいように……」

パターソンは力なく言った。（二一九頁）

インド人労働者の帰国を認めないばかりか、アフリカ人労働者の管理までをダルカンスに任せようというのだ。ダルカンスは、かつて逃亡したアフリカ人労働者を鰐のたむろする川に平然と投げ込んだ男である。オハラ次長は植民地政策下の会社という組織の一員であったし、パターソンも結局はそれに従わざるを得なかった。否、パターソン自身も時代の人間として、本質的に見てオハラ次長とそれほど違いはなかった。パターソン暗殺の噂が工事現場に流れ始めた時、「支配者たる英国人が、被支配者であるインド人やアフリカ人に負けてはならない、という気もある。」（一五三・一五四頁）と、その心境が書かれている点などに如実にあらわれている。暴動勃発直前の揺らぐ心の表現ではあったが、この白人優位の思想は、文明論者パターソンとしては当然のことであった。作者は、イギリス植民地政策下のパターソンという現実的な人物を登場させ、差別のない人間愛に真に目覚めていく過程を表現しようとした。そして、それはブータを信頼し、限りなく愛するという行為の積み重ねによって初めて可能であったのである。

作者は又、アフリカ人の驚嘆すべき能力を随所に表現している。特にマサイ族の描写において顕著であった。彼らの目、耳、鼻等の感覚の鋭さはまさに野獣的なものであり、ブータが蝗の大群の襲来を予知した本能は、その最たるものだった。ライオン狩りの手法も卓越したものであった。これらは数千年の昔から、アフリカの大地に住み、その自然と野獣と共に生きることによって獲得してきたものである。

作者は更に、大酋長レナナが視察から帰ったことがたちまち知れ渡っ

たことを、「羚羊のように速く走る彼らの伝令によって……また部落から部落へと意志を伝える木の太鼓の響きによって……。それは文明の世界では想像されないほどのすばやさと、正確さとをもっていた。」（六一頁）と書き、生い繁った熱帯性のジャングルの中をはだしで突き進むブータと靴をはいたパターソンとを比較して、「野獣と、文明しか知らない哀れな人間との競走で、パターソンには勝ち目はなかった。」（七六頁）と述べている。文明社会との違いに新鮮な驚きを覚えており、次の場面はいっそう示唆深い。鰐に下半身を食いちぎられ、上半身も傷だらけの石工頭ヘラシンギの死体が川から発見された時、ビヤード医師は事故死と診断した。それに対してブータは、「あの人、ただの白人のお医者さん。眼で見たことしか解らない」（一四五頁）という。ヘラシンギはアフリカ人、人喰ライオンや鰐の恐さも十分知っていて、夜川端へ出るはずがないというのである。これなども黒人社会からの文明批判として面白い。大酋長レナナの描写においても、その能力は高く評価されている。優れた野獣的な本能の上に、明晰な頭脳と冷静な判断力を持ち、時代を予言する洞察力をも持ち得た人物としてとらえられている。作者のこの少数異民族に対する敬愛と親愛の情は、差別の無い人間愛と表裏一体をなすものであり、これこそ作者の表現しようとしたものであろう。

## (二) パターソンの動物愛

パターソンは、「文明の曙光をアフリカ大陸に」と考える。これは文明の力によって自然を切り開こうとすることを意味する。自然に対する挑戦でもあるが、これがある時挫折する。蝗の大群が基地を襲った時であった。人々は火を燃やし、棒を持って戦う。貪欲な蝗たちは樹木や草原を裸にし、テントや人々の衣服をも食い破り、駅も病院車も虫だらけになった。闘争は二時間で終わった。

パターソンはアフリカの恐ろしさを、はっきりと知った。アフリカという原始の世界がもつ身の毛もよだつ非情さを、いま初めて知らされたと思った。

自分はアフリカをあまりにも知らなかった。人間の力で、この暗黒の世界を征服し、文明の光の中に浮かび上がらせ得ると信じていたがとんでもないことだ。

人間はこの大自然の偉大な力に立ち向かい、うち勝つことなどとうてい出来はしない。ただ自然の恵みに甘え、その情にすがって偉大な力を利用させてもらうだけだ。

小さな昆虫である蝗にすら敗退したではないか……。何という思い上がった気持でこれまでやってきたのだろう。

パターソンは羞じた。パターソンは過ちに気づくと、謙虚にアフリカの大地に生きてゆこうと決心した。（一二四頁）

大自然の偉大さへの開眼ともいえるが、時にはその自然への闘志をむきだしにするパターソンでもあった。

パターソンはずぶ濡れになり、鉄橋の鉄柵につかまり奔騰する川面を睨んでいた。彼は自らの眼で、自分たちが渾身の力をこめて創り上げた橋の強度を見きわめようとしていた。

風雨は刻々と激しさを加え、鉄桁は雨と風に向かってきしきしと歯がみする。橋脚は怒り狂う泥流に対して轟々と吼えつづけている。

「勝つ！きっと勝つ。魂をこめて創ったこの橋がそんなにもろいはずがあるものかッ」

パターソンは自分を信じるように鉄橋を信じた。（中略）

自分たち人間が創り上げたこの砦で、大自然の攻囲軍を撃破するのだ。

パターソンは鉄のてすりを握り潰さんばかりに力をこめてつかみ、

腹や両足に力を入れて立っていた。（一三〇・一三一頁）

蝗に敗退して、大自然に謙虚であろうと決意していたパターソンではあったが、ここでは自然を征服しようと思っている。この相反した葛藤の中で、パターソンの鉄道建設への苦闘は続く。その上、象群の巨大な壁に出会って、更に自然の力をいやというほど思い知らされる。人喰いの黒鬣を包囲し、今一歩という時であった。凄まじいラッパの突撃が始まった。巨象の群れが巨大な壁となって驀進してきた。パターソンは小岩の陰にミッシェルを押し倒して、その上に身を投げた。

地響きが近づいてきた。パターソンはミッシェルの体をぎゅっと抱きしめた。巨木のような象たちの足が二人の体を踏まないで通りすぎてくれることを願った。

荒らあらしい象たちの唸り声が、二人の肝を凍らせた。岩を小楯にしているとはいえ、そんな小岩なんか、象にしたら石のかけらほどにしか思うまい。

木の折れる音、石のとび跳ねる音。足音が頭上に迫る。ずうん……と肉体が硬直した。

「神よ！」

パターソンは思わず祈った。欠け耳と素手で対決したときも、彼は神を口にしなかった。神に救いを求めなかった。自分が全力をつくし、あとは神の意志に従えばいいと常日ごろから思っている。

だがこのときだけは神の援けがほしかった。ミッシェルのために、神の力を得たい。（二三四頁）

ミッシェルのためという要素が加わっていたとはいえ、パターソンは初めて神の名を口にしたのであった。こうした大自然への畏怖の感情はそれへの愛を育み、その保存へと心が動いていった。

象に蹴られた脛の治療のために、パターソンは一週間を病院のベッドの上で過ごした。一日足慣らしの意味で、馬で野獣の被害状況をミッシェルたちを伴って見廻ることにした。その年は、この地方を何年に一度かの割合で周期的に襲ってくる大旱魃の年に当たっているらしく、サボ駅を中心とする広大なサバンナは、焼けつく太陽にさらされて砂漠化しつつあった。水と草を求めての草食獣たちの大移動が始まっていた。子象が二頭置き去りにされていた。一頭は既に死に、一頭は死にかけていた。

「なんとか、この子象を助けられないかしら……」

ミッシェルはパターソンに願った。パターソンは首を横にふって、

「苦痛を救ってやるのが、いまは一番いいことです」

パターソンは鞍から銃を引き抜いた。ミッシェルは馬腹を蹴って、そこを離れた。

見たくなかった。聞きたくもなかった。彼女は両手でしっかりと耳を押える。

銃声が響いた。

やがて、パターソンが馬を走らせてきた。駒を並べて歩いたが、どちらも一言もいわなかった。パターソンのとった行為が、子象の苦痛を救うためだとは解っていても、ミッシェルの心のどこかには、むごい行為に思えて許せないという気持がひっかかっていた。

パターソンはしばらくしてからぽそりと呟くように言った。

「何十年先になるか、わからないけれど、われわれはこの土地に人工池をつくり、運河を掘って、野獣たちがこんなみじめな生き方をしないですむようにすべきだと思うね。

われわれが鉄道を敷くのはアフリカの奥地に文明の光を投げかけ、アフリカ人たちを救うと同時に、われわれも利益を得るためなんだが、それだけではいけないと思う。

人間だけが幸福であればいいという考え方ではいけない。もう一歩すすめて、野獣の保護地区を設定して、そこでは生命あるすべてのものが倖せになることを考えるべきだろう。その第一歩の歩みとして鉄道が必要だ、と考えているのだが……」

「すばらしいわ、ジョニイ」

ミッシェルは眼を輝かした。（二三七・二三八頁）

大自然への畏怖の情が自然への愛を呼びさましていったのであろうが、同時に神の名を口にしたパターソンとしては、神のつくりし野生動物に神の子人間として愛を注ぐことは当然でもあった。ブータの野獣のような本能に感嘆し、彼を信頼し、愛するという行為の積み重ねによって、真の人間愛に目覚めつつあったパターソンとしては、その愛が野生動物に及んでいくことは必然的なことでもあったろう。

パターソンの動物愛をより確かにしたものに、人喰ライオンとの戦い、対話があった。なかでも欠け耳とのそれは、出会いからその死に至るまで、作者がもっとも力を入れて描いているように思われる。

欠け耳との出会いはハルスレンの通夜の宵であったが、両者の最初の対決は、マサイの大酋長レナナのもとへ決死の思いで出発しようとした、ある明け方であった。大きなバオバブの根元に蹲っている黒い影があった。紛れもなく、それはハルスレンの銃弾によって、右耳の三分の一をふっとばされた人喰ライオン欠け耳であった。パターソンは、「よしッ、俺は無手でこいつとぶつかってやろう」（七〇頁）と決意した。

パターソンはそこでゆっくりとした足どりで……しかし、決然として、確実に同じ歩幅と、同じ速度で、欠け耳の方に歩きだした。

ただ彼の視線は火を噴くほどの強烈さで猛獣の琥珀色の眼に注がれていた。

一歩、二歩、三歩、四歩……距離はちぢまってゆく。十メートル、八メートル、六メートル……。

欠け耳も、パターソンの眼から視線を外らさなかった。二本の視線は、両者の中間で切りむすび、火花を散らした。（中略）

どちらの意志が勝つかが、すべてを決めるのだ。パターソンは勇気で対決した。筋肉が決定する力では人間はライオンに絶対に勝てない。しかし、精神力では人間は獣の下ではない。パターソンは下腹にぐっと力をこめて、ねむたい眼の魔力をはね返そうとする。

そのためにも歩調をゆるめることはできなかった。彼の眼は欠け耳の眼にぴたりと吸いついたままであった。パターソンは視線を外らすことが、そのまま死につながっているのを知っていた。同じように絶対に道をゆずってならないことも知っている。立ちどまることも、後退することも死であった。

もはや何が起ろうとも前進するだけだった。彼の肉体は石のように固くなり、つめたく冷えきった。それなのに彼の精神は逆に発光した天体のように熱く燃え上がっていた。

三メートル……二メートル……欠け耳はそこでざわッと草をそよがせて立ち上がった。瞬間、パターソンの体を蔽った毛の一本一本が防禦を意識して逆立った。血の一滴一滴が抗議のために凝集した。彼の呼吸はとまった。動いているのは彼の足と、瞳から発光する意志の力だけだった。

欠け耳の黒褐色の濡れた鼻が、パターソンの狩着にくっつきそうになった。

欠け耳は唸らなかった。逆毛も立ててはいなかった。それは彼女がパターソンに敗退していないことを示していた。しかし、欠け耳は、未だかつて出逢ったことのないこの不思議な人間にあきれ返っていた。

（七〇～七二頁）

こうして、パターソンは危機を乗り切った。その後、幾多の苦難もこの時の自信を挺子に切り開いていく。

欠け耳との最後の対決は次のように書かれている。パターソンは病院車の屋根の上で、我が身を月光にさらして欠け耳を待つ。作戦は適中し、欠け耳に重傷を負わせたパターソンは、翌日追跡隊を組織し、血痕を追っていった。その日の夕方、ブッシュの陰から突然欠け耳が飛び出してきた。パターソン・ホワイトヘッドの銃弾を三発も浴びながら、欠け耳は怯まなかった。

欠け耳は自分の最期をパターソンと刺し違えることで飾ろうとしているかのようにまっしぐらにパターソン目がけて突撃してくる。その様子は確かに不死身の悪霊（セタニ）と称するに適わしい。

パターソンはぞっとした。いくら射ってもこのライオンは死なないのではないかと思えた。

パターソンも刺し違えを覚悟した。そこでおそらく最後になるであろう弾丸を確実に叩きこむために、欠け耳が四メートルの至近距離に迫るのを待った。

ライフルの弾丸が、欠け耳の前胸部の毛をとばし、肉を抉り心臓部へとねじ込んでゆくのがはっきりと見えた。

欠け耳は、とび違ったパターソンと入れ替わってのめり込んで倒れた。

パターソンは用心して、三メートルの距離を保ち、銃口を欠け耳の頭に向けて、この恐るべき人喰いの断末魔の模様に眼を見張っていた。

ホワイトヘッドが木から降り、ブータたちも近よってきた。

うつ伏せに伸びている欠け耳の肩と背がひくひくと激しく波うち、誰の眼にもその最期が数秒後に訪れるであろう、と見えた。

そのとき信じられないことが起こった。最後の力をふりしぼって、欠け耳はむっくりと立ち上がった。彼女の偉大なる牙――ハルスレン所長をはじめ、何十人もの人命を奪った白く輝く武器――が夕陽に、きらっと輝く。

眼が、睡りを誘いこむような琥珀色の眼がパターソンの眼にじっと吸いついた。

それから欠け耳は、右の手を持ち上げた。いっぱいに開いた掌。鋭い爪が空間をつかんだ。

パターソンは、ひき金をひくのも忘れて、この怖ろしい敵の強靭さに魅せられていた。

欠け耳の瞳から、力が急激に失われた。そして、欠け耳はふたたびのめって、もう動かなかった。

喜びの叫びが爆発した。マサイ戦士たちが欠け耳の巨大な屍の傍で躍りまわった。

だが、パターソンは喜ぶ気になれなかった。あまりにも恐ろしい、偉大なる強敵を破って、一種言いようのない感激にひたっていた。彼は喜びとも、悲しみともつかない感慨の極致にしばらく、じっと身を沈めていたかった。

彼は大空を仰いだ。金色の夕焼け雲が、真ッ赤に染まったサバンナの上に流れている。（二六三・二六四頁）

パターソンの欠け耳に対する憎悪は、並大抵のものではなかった。自分をインドから呼んでくれた親友ハルスレンをはじめ、何十名もの人命を奪った欠け耳である。ハルスレンの通夜の折、パターソンは「見覚えておけばいつか必ず仇を討ってやれる」（二五頁）と忍びよってきた欠け耳の姿を追う。リーダー格の一頭、三本指を射殺したときも、その屍を前にしてミッシェルに、「兄さんの仇でなくて残念だけど、あの欠け耳だって近いうちに必ず仕とめるからね」（二五四頁）というのであっ

た。然るにそうした憎悪の念はこの最期の場面において、パターソンの脳裏から寸時忘れ去られてしまったかに見える。憎むべき牙も「偉大なる牙」と作者によって表現され、パターソン自身も欠け耳のことを「あまりにも恐ろしい、偉大なる強敵」と認識している。宿願を果たしたという感動の中には、感喜とともに偉大なものを失ってしまったという、一種悲しみにも似た感情を併せ持っていたのであろう。金色の夕焼雲を仰ぐパターソンの脳裏には、強靭にして偉大なるものをつくり出した大自然への思いがよぎっていたかも知れない。

偉大なるライオンを人喰いに変えたのは、人間のなせる業であった。サボに人喰いが誕生したのは、隊商ダルカンスの一弾によってであった。

たしかにサボはライオンが多い。しかしながらライオンが人間を襲ったことはまだ一度もなかった。

人間はライオンを殺そうとしなかったし、ライオンの方も人間を殺そうとしなかった。人間はライオンが縞馬やウシカモシカ（ワイルドビースト）を襲って殺し、争って喰っている光景を嫌になるほど見てきたし、ライオンも多勢の二本足の連中が群がり集まって何かをやらかしているのをブッシュの中からじっと眺めていた。だが人間もライオンも自分たちの邪魔にならない限り相手を犯すべきものでないと知っていたので、両者の間には奇妙な友情のようなものがあった。

その友情の均衡をダルカンスが破ったのだ。（七頁）

傷つけられた黒鬣は十日間ほどを呻き続け、体力も消耗して背に腹は変えられず、はじめて人間を襲った。かくして人肉の味は次々と仲間のライオンにも伝えられ、やがて二百人以上の人命を犠牲とする悲劇にまで発展していった。パターソン自身もその事実をしっかり受けとめている。最終場面におけるナイロビからモンバサへの処女列車の車中において、窓外のライオンを的に、「君の腕前を見せてくれないか」とのマックロック長官の言葉に、「長官、よしましょう。戯れの狩猟が人喰いたちをつくりだしたのです」（二八二頁）と答えるのであった。人間のなせる業に反省し、人喰ライオンに対する理解を示した言葉である。

人喰いであると人喰いでないとを問わず、自然の掟のままに懸命に生きるライオンたちの生きざまに接して、パターソンの野生動物への理解は深まっていった。マックロック長官をたしなめた後、作品は次のようにして終わっている。

パターソンは、いつの日か、このアフリカの大地が、ライオンの存在すらも愛情をもってうけ入れるときがくるにちがいないと思うのだった。（二八二頁）

この「いつの日か……くるにちがいない」という表現にパターソンの思いが託されている。文明によって、アフリカの大地に住む動物たちの飢餓を救わねばと願ったパターソンであったが、更にライオンのような危険な猛獣との共存の世界にも、思いを馳せていると見ることができる。現存する野生動物保護地区への作者の感動が、そのモチーフとなっていることは間違いのないところであろう。

## ㈢　まとめの考察

ウガンダ鉄道の第一期工事、モンバサ、ナイロビ間の鉄路は遂に完成し、白人、黒人の区別なく喜びあふれて開通式を迎えた。パターソンのロンドンへの栄転が発表された。ナイロビ駅を出発する時の処女列車の賑わいは、格別のものであった。

空は青く晴れて、太陽はぎらぎらと輝いていた。

客車にはマックロック長官、アンダーソン本部長、オハラ次長、それにパターソン夫妻その他多勢が乗り込んでいた。

ミッシェルの膝には、兄ハルスレンの遺影がしっかりと抱かれてい

る。

苦労してきたこの土地、怖ろしかったサボの生活――それももう過去のものになってしまったのだ。もう二度とこんな想いをすることはないだろう、と思う。それなのにパターソンには、ロンドンでの平和な生活を喜ぶ気にはなれなかった。空漠とした想いであった。

なぜだろう?そんなにも深く、僕自身がアフリカの人間になってしまったのだろうか……。パターソンはそっと、ミッシェルにたずねた。

「あたしも……」

とミッシェルは答えた。（二八一・二八二頁）

パターソン夫妻の「空漠とした想い」に共感を覚える読者も少なくないだろう。二人の約束された幸せは、多くの人々の犠牲の上に成り立っている。特に、ブータやビスケの献身的な死なくしてはこの日はなかったのである。

ところで、パターソンが鉄道建設のためにモンバサ港に入港した時のことを、今一度振り返ってみよう。「自分の手で創りあげてゆく鉄路が、これまでむくわれずにいたアフリカの人々にどれだけの光明を与えてゆくだろう……世界の文明がやがて自分が敷いたレールの上を走って奥地へ滲透してゆくにちがいない」（一七頁）と意気盛んなものがあった。そして事が成就した今は、「空漠とした想い」に襲われ、「そんなにも深く僕自身がアフリカの人間になってしまったのだろうか……」と思う。前者は、英国人としてアフリカの人々に光明を与えようとする態度であり、後者は、自分自身がアフリカの人になりきって、つまりアフリカの大地を愛し、存在する全ての命を愛する、どんな危険があっても逃げ出すことなく、それらと共に生きてゆこうとする心のありようを示す。英国人としてやってきて、今また英国人として去ろうとするパターソンではあるが、両者の間には大きな変容を見出すことができる。

「人喰鉄道」は一九六六年（昭41）、六七年（昭42）の二度にわたる現地での取材をもとに構想されたというが、一九六七年に訪れた際のマービン・カーウィ氏の言葉は興味深い。

ライオンですらやたらと殺戮はしません、腹が減ったときだけ殺すのです。人間も生物の一員である以上は、他の生物の犠牲によって生きていかなければなりませんが、それは必要な限度でとどめるべきで、必要以上に他の生命を脅かすことは厳重にやめなければいけません。動物の保護とは、言いかえれば生命の尊重ということです。自分の生命を大事にするように、他の生命も大切にすることです。なぜ動物は保護されなければならないのかと言えば、人間よりはるかに知能も低い彼らの生命を守って、共存共栄の世界を推進させようという根本の理念に出発点をおくからです。これは大きな愛なのです。この考えをさらに発展させていけば、発展途上国への援助ということにもなりましょうし、戦争防止ということにもつながりましょう。[注1]

マービン・カーウィ氏は、「アフリカに初めてナショナル・パークを設定して、アフリカの野獣を衰亡から救った恩人」[注2]である。この「大きな愛」は、野生動物の保護、野生動物との共存を夢見るパターソンに投影されているように思われる。ただ、パターソンの生きた時代は十九世紀末であり、その思いが文明による生態系の破壊、野生動物の滅亡という視点からのものでないことは言うまでもない。が、作者自身はそれを見通し、文明の進むべき方向をも示唆しているように思う。

野生動物の滅亡という視点から、野生動物の保護地区設立への志向を見せた戸川の作品には、「黄色い嵐」[注3]がある。この作品は黒鬣の雄ライオン〝星〟の成長物語であり、マサイ族のブアナ・ロコ夫妻との交流物語である。しかし、白人ハンターたちによって、星の仲間が理由もなく次々と殺戮されるに及んで、悲劇への道をたどる。怒り狂った星は次々

と白人たちを襲う。野生動物の滅亡の危機を救おうと懸命に奔走中の動物調査官チャップマンは、「野生動物の保護地区をつくるためにも星は殺されなければならない」とブアナに説く。白人の論理として抵抗を示したブアナではあったが、マサイの少女が襲われた現場を目撃して遂に星と対決する。最終場面は次のように結ばれている。

東アフリカのナイロビに野性動物のための自然保護地区が国立公園として設立されたのは一九四六年、つまりヤバイの星の魂が天に還ってから一年後のことであった。

星はマサイの人たちが信仰するヤバイの神が、野生動物の保護地区をつくるために地上に遣わしたものだという構想になっている。「人喰鉄道」より約五十年後の時代を背景としており、作者の動物保護の思想もより直截に表現されているが、作品の完成度は、「人喰鉄道」のほうがはるかに高い。アフリカ行き以前に書かれた「黄色い嵐」に対し、「人喰鉄道」には、戸川の二度のアフリカでの体験・感動が結実している。

## 三　「サバンナに生きる」についての考察

### [作品の梗概]

第一話

一九六六年（昭41）八月、「私」は幼少の頃から五十余年も温めてきた、東アフリカ行の夢をたった一人で実行に移した。ケニアのナイロビ国立公園・アンボセリ野生動物保護区などを見学した後、タンザニアのゴロンゴロ野生動物保護区へ向かった。ここでは、ロッジおかかえのベテラン運転手ジョーン（マサイ族）の案内で野獣を見て廻ったが、G夫人一家との出会いにより、多くのことを学び得た。

第二話

「私」と野生の象との最初の接触は、アンボセリ野生動物保護区であったが、次の年（一九六七年）の二月、マサイマラー野生動物保護区で、二人の友人と共に象の猛獣としての恐ろしさを知った。その年の八月には、G夫人をマニュワラ湖国立公園に訪ね、象についての調査に同行することができた。

第三話

次の年（一九六八年）の八月、「私」はゴロンゴロの火口原でハイエナとライオンとの関わりを調査しているG夫人を訪ねた。到着した夜、G夫人に誘われて、二つのクランの壮絶な合戦の模様を見ることができた。どちらのクランにも出入りする不思議な存在のパー爺さんを知り、今回はその調査に集中することにした。

第四話

次の年（一九六九年）、ゴロンゴロ野生動物保護区を訪れた「私」は、黒鬣のボスライオンのブラック・ジョーの暴君ぶりを目撃する。G夫人から、今回もライオンの生態・習性について、いろいろと講義を受けることができたが、なかでも共喰いの話は興味をひいた。二年後にゴロンゴロを訪れた「私」は、ブラック・ジョーの変わり果てた姿に接し、その最期を見とどけた。

### (一)　第一話「ゴロンゴロの火口原で」

東アフリカに初めてやって来た「私」は、ゴロンゴロ野生動物保護区で三つの貴重な体験をする。その第一は、ハイエナの群れが倒したヌーをむさぼり食う場面に遭遇したことであった。

ハイエナたちはジョーンが言ったように一匹のヌーを殺して、がつがつと喰っているところだった。たったいま殺されたとみえて、ヌーの見開かれた眼はまだ青く澄んでいて、夕焼けの茜色がぽっと滲んで

いた。

先客は三人だった。御主人と奥さんと彼らの赤ちゃんのようだった。赤茶色の顎鬚を生やした御主人はジープの屋根を開いて上半身をそこから出し、ハイエナたちの狂乱と怒号に満ちた凄まじい饗宴をしきりと撮影していた。金髪の奥さんは運転席に坐って赤ン坊を抱いていたが、私のジープが近よる気配にふり返って、にっこりと会釈した。（二〇頁）

これがG夫人一家と「私」との初対面であった。G夫人はイギリス人で、ナイロビの大学において動物行動学を教えている教授であり、夫のダンはオランダ人で、動物生態カメラマンであった。この日の「私」の感動は、翌日G夫人を訪れた際の、二人の会話によって推測することができる。

「日本に居るとき、私はハイエナは残飯あさりの野獣だというふうに聞かされていました。ところが昨日の、あの有様を見てその考えがまったく間違っていたことを知りました。やはりアフリカに来てよかった、と思いますよ」

と私が言うと夫人は、

「そうなんですね。ずいぶんと多くのことが間違ったままで伝えられていますものね。ですから自然はやはり偉大で真実を教えてくれる唯一の教室だと思います」（三〇・三一頁）

英語はカタコトしか喋れず、スワヒリ語に至ってはさっぱりという「私」が、単身アフリカ行きを決意したのは、「永年の憧れの地で、自由に生きている野生動物たちの本当の姿が見たいという願い」（一〇頁）からであった。その願いの一つは早速叶ったことになるが、その後のG夫人の話は、「私」の発見をいっそう確かなものにしてくれた。夫人の話は、残骸あさりはハイエナやハゲワシに限らず、ライオンや豹も行うことから始まり、ハイエナの獲物をライオンが奪う場面や、反対に多数のハイエナたちが、ライオンの獲物を横取りした場面の目撃談などへと豊かに展開していったのである。

第二の体験は、心ならずもシマウマの出産を妨げてしまうという胸の痛む出来事であった。シマウマの出産が始まっているという情報に、G夫人のジープに同乗して出かけた時のことであった。道路の真ん中でお産をしているシマウマを発見して、運転していたダンは急ブレーキをかけたが、驚いた母馬は産み落したばかりの我が子をそのままにして逃げ去ってしまう。ジープを後方に退けて見守っていると、仔馬は長い苦闘の末、自力で羊膜を破りよろめきながら立ち上がった。しかし、やがて近づいてきた母馬は、鼻を差し伸べて臭いを嗅ぐような動作をしていたが、十分ほどすると、くるりと向きを変えてぶらぶらと仲間のほうへと立ち去っていった。

「私たちは、うっかりして雌馬が赤ン坊の羊水を舐めるという厳粛な儀式を邪魔してしまったんです。

羊膜を噛み破り、赤ン坊の体についている羊水をきれいに舐めとるという行動は、母親がわが子に対する愛情を確立するのに重要な手続きなのです。

それを私たちは心ならずも妨げました。親子の愛情を結びつける重要な手続きを、たとえ他動的にしろ、省いたシマウマの親子はもう親子ではないのです」（三七・三八頁）

G夫人の話を聞いた「私」は考える。

私はそれまで羊膜と羊水とは単に胎内で胎児を育て、出産を安全にするための必要な道具というふうに考えていたが、これが母性愛、つまり母と子の結びつきにこんなにも重大なかかわり合いがあるとは初めて知ったのだった。この関係は、シマウマだけのものではあるまい。

私は人間にも、その残滓が残っているかもしれないと思った。人間は高度に発達した社会構造を持っているし、生活様式もシマウマとはまったく違っている。殊に出産の方法などは全然別物だから、羊膜や羊水が母性愛を喚起するという作用は、すっかり稀薄、あるいは消失しているかもしれないが、その重要性は母親である人間が意識していると、いないとにかかわらず暗闇の中で作用しているに違いない。それが俗に言われる〝お腹を痛めたわが子〟ということになるのではなかろうか――。（四一頁）

ここにはシマウマの出産において羊膜と羊水が、母性愛の確立に重要な関わりを持っていることを初めて知った「私」の感動が述べられている。更にそれは、「人間にもその残滓が残っているかもしれない」という思いに至るが、思索の底流には、人間は動物から進化したものであるという認識が窺われるのである。

第三の体験は、ヌーの母子再会という感動的なシーンを目撃したことであった。ライオンの襲撃を受けたヌーの群れが暴走を始め、迷い子が出た。G夫人によると、ヌーの母親はわが子以外に乳をやらないので、群れに入って自分の母親を見つけられないヌーの仔は、餓死せざるを得ないという。暴走がおさまって、一匹の迷い子を前にして、「なんとかなりませんかねえ」という「私」の言葉に、ダンは三つに分散している群れの一つに、ヌーの仔をジープで誘導した。

ヌーの仔はとことことジープの後をついてきた。

群が百メートルほどに近づいたとき、ヌーの仔は群のヌーたちが鳴くグーグーという音を聞きつけた。そこでジープを追いぬいて群の方へと走っていった。

群のヌーたちは一斉に頭をもたげて私たちの方を監視するかのように見つめていたが、突然その中から一頭の雌が飛び出してきた。するとヌーの仔も大声で喚きながらその雌に突撃した。それは動物とは思えない感動的な母子再会のシーンだった。

鳴きながら母と子は鼻をつき合わせ、頸を舐め、子は母の腹の下に鼻を突っこみ、母はそれを嬉しそうに許容した。だがそれもほんの一瞬で、母親はわが子をうしろに従えるとそそくさと安全な群の中へと溶け込んでいった。

「よかった！」

と私たちは顔を見合わせた。（四五・四六頁）

シマウマの出産と同じように、ヌーと人間とを重ね合わせて描いている。「動物とは思えない感動的な母子再会のシーン」、まさしく動物における人間の発見である。ただシマウマの出産の場合が、一見異なっていると見られる事象の中に、連続性を探っていこうとしているのに対し、ヌーの母子再会の場合は、人間との共通性がより直接的であるだけに、共感の度合も大きかったといえよう。

ところで作中の「私」こと〝ミスター・ヤマザキ〟とは、作者戸川の分身と見てよいであろう。戸川は作家であるとともに、動物研究家でもある。一九六六年（昭41）に幼少の頃からの憧れの地、東アフリカを訪れたのもミスター・ヤマザキと同じである。その他、両者は重なるところが多い。勿論、この作品が小説であることは論を待たないが、読み手としてはミスター・ヤマザキの目に、作者戸川の目が重なっていくのを感ぜずにはおれまい。そこでミスター・ヤマザキの目を通して、作者戸川の表現態度を今一度ふり返ってみたい。

その一つは、ハイエナが有能なハンターであることを発見した感動が示しているように、先入観にとらわれず、動物たちの本当の姿を明らかにしたいという態度であり、第二話以下へも受け継がれることになる。次に、動物たちの不思議を発見していく際に、人間との重なりの視点か

ら見つめようとする態度である。母性愛の確立、母性愛の発見への思索、感動がそれを如実に示している。既に見てきたように、そこに、人間は動物から進化したものであるという認識を基盤に据えた作者の目を感じる。こうした表現態度も第二話以下へ受け継がれていく。

### (二) 第二話「巨象の葬列」

第二話においては、作者の問題意識が鮮明に打ち出されている。「動物が肉親や仲間の死にあった時に、人間のような悲しみに陥るものであろうか」(八三頁)というのがそれである。「私」が長いこと温めてきた問題という設定がなされている。獲得した多くの情報をもとに「私」が到達し得ていたのは、「人間が動物の一つである以上、人間が持っているような情緒が人間だけの占有物ではないだろうと考える。私は高等動物に情緒らしい感情があるであろうことは疑わないが、仲間の死に対する恐怖や悲哀が、われわれのものと同じか、極く近いものであるかどうかということについてはまだ判断がつかないでいた。」(八四頁)といった境地である。これは、第一話の「人間は動物から進化したものである」という「私」の認識の発展としてとらえることができる。

「私」はウガンダ国のマーチソン・フォール国立公園に赴き、牙を抜き取られた二頭の象の白骨死体を前に、レンジャーのバーゴたちと意見をかわし、象の死に対する感覚に問題意識を持ちながら、G夫人一家をマニュワラ湖国立公園に訪ねた。夫人は象社会の生と死の問題を探求中で、「私」は彼女から多くのことを学んだ。なかでも、仲間の死に対する象群の反応を見ようとする夫人の実験に同行出来たのは最大の収穫であった。

その実験というのは、セレンゲティ国立公園で発見された象の白骨体を、観察しやすい場所として選んだンダーラー河の川辺に運び、象たちがそれをどのように扱うかを追跡してみることであった。一時間ほどして二十数頭の群れが、森の方から姿を現わした。ボーデシアという雌象に率いられた雌象と仔象との大きな家族グループが、水飲み・水浴びにやって来たのだ。白骨体を発見して、象たちは慎重な態度で近づいていった。

一番前に出ていたボーデシアがまず鼻を骨に触れ、臭いを嗅いで調べたあと、こんどは前足でそっと死体を蹴り動かした。

それを見て背後のゾウも安心し、近よって個々にくわしく調べだした。

骨の中でも牙が特に関心を呼ぶことが二百メートル離れていてもよく解った。

牙はゾウ仲間に大変な昂奮を呼び起したらしく最初はボーデシアによって二本とも拾い上げられ、口にくわえられていたが、やがてゾウからゾウへとリレーされた。それは殿様が下げ渡した大盃を重臣たちが有難く頂戴し、次に廻しているように思えた。

順番の来ない若ゾウは肋骨などをくわえた。ある若ゾウは重い骨盤を抱えたものの、持ち耐えられずに十歩も歩かないところで落してしまった。

別のゾウは足の骨を抱え、また別のゾウは肋骨をしゃぶるようにゆっくりと口の中で回転させている。

ゾウたちはそれぞれ骨を拾い上げて弄んでいるようにも見受けられたが、そのうち牙をくわえたボーデシアが歩き出すと、みんなもそれぞれ骨を抱え、またはくわえてついて行った。

そして水飲みや水浴びをまるで忘れたように土手に登り、森の方へと向った。(中略)

ゾウたちは、しかし、それらの骨を森へ運び込むのではなかった。

土手に上り、草むらを百メートルも歩かないうちに飽きた玩具を投げ捨てる子供のように捨てて行った。

ボーデシアすらも、最後に牙を遠くへ抛った。ちょうど夕刻が近づいていて、太陽が森の樹冠に没する頃であったのでそれは何とも言えない不気味な感じだった。（一一〇・一一一頁）

帰りの車中での、「あれは単なるお遊びでしょうか？それとも一種の埋葬行動なんでしょうか？」という「私」の問いに、G夫人は「わかりません」と答え、更に言葉を続けて、「どのような刺戟がこうした反応を引き起すのか、こういった行動がゾウたちが生存してゆく上にどんな価値があるのかについてはもっともっと実験と観察をつみ重ねた上でないと何とも言えませんね」（一一二頁）と結んだ。「動物が死への恐怖や愛惜を持っているだろうか」という「私」の、最後のとっておきの質問にも、

「ゾウが死の感覚を持っていると断言するのは現在の段階では言い過ぎではないでしょうか……。骨や牙に対するゾウの態度がどのように神秘的で不思議であろうとも、生態学的な問題に死がどう関連するかということは統計的な手法によってのみ明らかにされることだと思いますよ」（一一二頁）

と答えるのであった。

第二話において、「私」を通して作者が追求しているのは、「動物に情緒が存在するか」という動物学上の興味ある問題である。作者は象を対象にそれへのアプローチを試みている。第一話のシマウマの出産においては、母性愛の確立の仕方の残滓を人間に見ようとしたが、ここではそれとは逆に、人間性の萌芽を動物に発見しようとしている。

### ㈢ 第三話「パー爺さん月下に死す」

第三話は、第一話におけるG夫人の「私」への言葉「ハイエナは生まれながらのピエロで高度に個性的な動物です。その社会生活もきわめて複雑で、人間のようによく整備された社会を構成しているんです」（三五頁）を受けて構想されている。作者の関心事はハイエナにある。

ゴロンゴロ野生動物保護区に到着した夜、「私」はG夫人に誘われて、ロックス・ヒル・クラン（岩山一家）とレイクサイド・クラン（火口湖一家）との凄絶な合戦を見学することが出来た。岩山一家の一群は、リーダーのメリー、補佐役のアスターに率いられて、火口湖一家に殴り込みをかけた。敵の陣営深く侵入していったアスターが、次第に落ち着かない様子を見せ始めた。

火口湖一家の連中が唸りをあげて突撃してくると、アスターたちは自分の仲間の方へ逃げ戻ってきた。救援部隊の方は、さらに後からも仲間が続々と集ってきたので、その数は岩山一家の殴り込み部隊よりも多くなっていた。岩山一家は火口湖一家に押しつけられて、道路から遥かに後退した。それを追撃する火口湖一家。だが、岩山一家の縄張り内に侵入して来ると、こんどは火口湖一家に次第に自信がなくなり、勇気を得た岩山一家が押し返した。

こうして、境界線の道路を挟んで両者は押し込んだり、押し返したりの小競合を幾度かくり返した。

私はこの有様を見て、初めて縄張りというものが彼らにいかに心理的に大きな作用をするものか……ということを悟った。（中略）

これは人間にも通ずることに違いない。ナポレオンがロシア領内深く進撃しながら敗退したのも、第二次大戦で、独軍がレニングラードまで押し込みながら惨敗したのも単に冬将軍が露軍に味方したからではなかったろう。多くの人が見落としているこの縄張り意識が両軍兵

士の心理に大きく左右したに違いない、と私には思えてきた。

ハイエナたちは敵の領土に入ると戦意を失ったが、自分の領土に戻ると尾をぴんと巻き上げ、牙をむき出して、勇敢に怒号した。（一三〇～一三二頁）

こうして激闘は続くわけであるが、作者はハイエナの縄張り意識が与える心理的影響を、ここでも人間と重ね合わせて取り上げている。こうした態度は第三話においても一貫しており、たとえばG夫人の「ハイエナの境界線は長期に亘って安定しているものではなくて、そのときのクランの勢力次第で進出もすれば後退もしている、つまり領土の拡張や縮小は一家の実力次第だ」（一二七頁）という説明に対して、

私にはG夫人の話が戦国時代のわれわれの祖先と同じだと思われた。上杉、武田、今川、織田、豊臣、徳川と血で血を洗う勢力争いをくり返して、遂に天下を統一した秀吉にしても、家康にしても、していることはハイエナたちとちっとも変っていない。戦国時代だけではない、今日の世界情勢だってそうだ。力の強い者が無理を押し通し、弱い者は生き残る為にじっと耐えなければいけない。所詮人間もハイエナも同じ動物であり、同じ群をなし、社会をもつ動物である以上、根本的には同じことを為すのであろうか……。（一二七頁）

と書いている。更に作者は、G夫人自身にも、

「これは戦闘でしたが、戦争全体を現わすものではありません。それにハイエナの勢力争いというのは、人間のそれにとてもよく似ていて複雑なんです。一つのクラン対クランでないことが多いのです。最初は一つのクラン対クランで戦いを始めていても、負けかかった方が他のクランに援助を求めることがあります。そうすると一クランに対して二つも、三つものクランが共同して戦いを挑むということがあり、結局、勝ちかかっていたクランが敗退するということが生じるのです」（一三四頁）

と言わせているのである。

以上のように、ハイエナの社会はテリトリイの攻防をめぐって複雑な様相を呈しているが、ハイエナたちが外に向かってクランの縄張りを重要視しているのと同時に、クランの中では順位というものをひじょうに重く見ている。ハイエナのクランは女家長制に支えられており、すべての雌に順位があり、その後に雄が続くというふうになっている。そして、上位の雌から生まれた仔は生まれながらにして順位が上である。こうしたことをG夫人から知らされた「私」の考えは、次のように書かれている。

世襲制度なんだな、と私は思った。しかし、動物の世界にも、われわれ人間の、しかも封建時代に見られたような世襲制度が存在するということは驚きであった。将軍の子はハイエナ社会でも、やはり将軍であり、町人の家に生まれた者は武士になれないのである。（一三九頁）

ハイエナは単独生活者であるとともに、集団生活者でもあるという二面性を持つ。それをうまく調和させるために、その社会はよく整備されたものになっている。そして、それぞれの順位を常に確認しあうために複雑なコミュニケーションが存在しており、出会いの儀式ともいうべき下位の者が上位の者に対して、又、雄が雌に対して行なう礼節が守られている。G夫人の講義を「私」はこのように受けとめていくのであるが、まさしく人間的視点からの考察といえよう。

このような社会を構成している単独生活者としてのハイエナの個性へも作者の目は向けられている。パー爺さんの存在がそれである。前に述べた二つのクランの戦いを見学した帰途、「私」は引きあげていく岩山一家の中の、返り血ひとつ浴びていない年とった雄ハイエナに気づくが、

それがパー爺さんであった。敵対するいくつかのクランに自由に出入りして生活し、それぞれの雌とも交尾し、仔獣と遊ぶことも許されているという。パー爺さんの名の由来は、スコッチウィスキーのオールド・パーからのもので、オールド・パーのパー爺さんがセックスに関して巧みで、精力的であったことから、G夫人が命名したものであった。その行動の不思議さはG夫人をして、「どうしてそんなのが生じるのか、またそういった存在がどうして許されるのかわかりませんが、雄に限っています」（一三六頁）と言わせているが、その求婚の模様は次のように描かれている。リーダーのメリーに発情期が訪れて、数日前から雄たちがまつわりついている。次々とメリーの前に現れ、求愛行動と思われるおじぎ動作を個性的にくりひろげるが、いずれも失敗に終わる。待望のパー爺さんが現れた。

パー爺さんの周囲には、ふられ組の雄たちが何匹もうろうろしているところを見ると、パー爺さんは雄たちの間では大して尊敬されている立場にはなかったのだろう。

だが、パー爺さんの仕ぐさは自信に満ちていたし、またブラディ・メリーの態度にも変化が見られた。

一応のおじぎ動作や、穴掘り動作は見られたが、パー爺さんには他の雄たちのようなおどおどしたところはなく、またメリーもパー爺さんに対しては邪慳に咬みつく動作はしなかった。（中略）

パー爺さんは頃よしと見たのか、メリーの背後にまわり込み、前足で彼女の体を抱え込むようにし、胸を彼女の背に密着させ、彼女の首すじをやんわりとくわえた。（中略）

G夫人の低い囁きがメリーの耳に聞こえたかどうかは解らないが、メリーはすっと立ち上った。

しかし邪慳にパー爺さんを振り払ったのではなかった。ここでは嫌……といった態度を体全体にあらわしながら、彼女の寝室である繁みへと入ってゆき、パー爺さんが後に続いた。

その直後に生じた草の揺れで、私はすべてを察した。だがG夫人は学者として、こんどの観察も失敗だったと言うかもしれない。しかし、このときほどハイエナが人間的で、なまめかしいと感じられたことは私にはなかった。（一六九・一七〇頁）

ハイエナのことを「人間的でなまめかしい」というふうに「私」は感じているが、雄たちの求愛行動に、そしてそれに応じる雌の動作に、作者は人間らしい情緒のきざしを認めているのではなかろうか。[注4]

パー爺さんは、G夫人やダン、そして「私」やジョーンによって「要領がいい」というふうに評されている。ジョーンによっては、更に「したたかな」というふうにも評され、自然に生きるもののたくましさが強調されている。こうしたパー爺さんの生き様は、ライオンとの関係においても遺憾なく発揮される。「私」はパー爺さんがライオンの仔を盗んで運ぶ場面を目撃するが、もちろんそれは食うためであった。G夫人は、そんな事はしょっちゅうであり、ライオンのほうも仕返しをしようと狙っているという。「私」は又、次のような場面にも出くわした。

ある晩、私はハイエナの群にとり囲まれた黒い鬣の、獲物を捕らえたばかりの大きな雄ライオンが一頭のハイエナにうしろの左足を咬みつかれて激怒し、咬みついた奴を八ツ裂きにしようと襲いかかるのを見た。

ライオンの前足がそのハイエナを捉える寸前、ハイエナは丸くなって逃げ、ライオンはよほど怒ったとみえて二百メートルほども追跡していった。

その間に、約三十頭を越すハイエナたちがわっと獲物に群がり、喧騒の中にみるみる肉を喰いちぎったのだ。

ライオンを獲物の傍から引き離す役目を買って出たのはパー爺さんだった。（一五二頁）

第一話を受けて、この章でもブチハイエナが有能なハンターであることや、獲物をめぐってのハイエナとライオンとのいさかいが目撃談を交えて随所に語られるが、この場面はその一コマとしてパー爺さんの面目躍如たるものがある。

そのパー爺さんも命運の尽きる時が来た。滞在日程があと二日を余すのみとなった晩のことだった。「私」はG夫人たちと、一頭のエランドを中央に、岩山一家とムンジ川一家とが月光を浴びながら、対峙して吼え合っている場面を目撃した。そこへ突如として、巨大な雄ライオン二頭が躍りかかったのであった。たった一頭逃げ遅れたハイエナの行手に、巨岩が壁となってさえぎった。土煙がおさまると、動けなくなって呻いているパー爺さんがいた。

パー爺さんを襲ったライオンは、一撃を加えておいて、他のハイエナの追撃に向ったのだ。

パー爺さんの苦しげな悲鳴が冷い月の光の中を流れていった。

やがて、ものの三分も経たないうちに黒い鬣の大きい方の雄ライオンが戻ってきた。

彼は苦悶しているパー爺さんの五、六メートルほど前方に立ちどまって、尾を左右にうち振りながらパー爺さんをじっと眺めていた。

パー爺さんもライオンを見つめた。爺さんのまっ黒な、大きな瞳が自分の運命を悟って、涙に濡れ光っているように私には思えた。

ライオンは荒い呼吸をなんどかした後で、ゆっくりとパー爺さんに近づいて行った。

パー爺さんは怯えたように顔をゆがめて、口を大きくあけ、白い牙をむき出した。

しかしそれは反撃にうつるための表情ではなく恐怖にひき攣った顔であった。

ライオンはパー爺さんを快げに見下していた。憎い憎い相手をとうとうやっつけるときが来たぞ――という喜びに燃えていたようだ。彼はしばらく弄んだあとでパー爺さんにのしかかると、爺さんの咽喉を咬んでぎゅうと押しつけた。

爺さんの前足が突っ張り、痙攣が起り、間もなくすべてが終った。

（一七二・一七三頁）

「要領のいい」パー爺さんも遂には死に至る。自然に生きるもののきびしい掟が感じられる。いずれにしても「生まれながらのピエロで高度に個性的な動物」として描かれたパー爺さんの個性は、その死の描写をもって完結する。

ところで、パー爺さんの屍は二世たちによって食われる。「共喰いという、ぞっとするような葬儀の仕方が彼らにあることを私はまたも新しい学問として学び得たのであった。」（一七三頁）という一文で第三話は終わるのであるが、「共喰い」への興味は第四話へと引き継がれていく。

### ㈣ 第四話「共喰い」

第四話の作者の関心事はライオンにあり、黒鬣のブラック・ジョー（G夫人の命名）を中心に据えて構成されている。ブラック・ジョーについての「私」の目撃場面は二つであったが、第一は五頭の雌ライオンがヌーを倒した場面である。ライオンたちは獲物を発見すると、リーダーを先頭に二・三番目が前進し、四・五番目は待機した。二十分ほどが経った。

リーダーのライオンは行動を起した。極端に姿勢を低くし、最後の薮に向ってそろそろと這って行った。（中略）

続いて二番、三番、四番と順々に行動を起して、前の者が匿れてい

た場所へと前進した。動かなかったのは一番小さな五番目のライオンだけだった。

リーダーのライオンがたどりついた薮から一番近いところに居るヌーまでは一五、六メートル、もう両者の間には身を匿す物は何も無かった。ライオンたちはそれぞれ一二、三メートルほどの距離を置いて一列縦隊になって伏せている。薮かげに居る先頭のリーダーだけが立っていた。みごとな布陣と言えた。（一八六・一八七頁）

こうしてリーダーの指揮のもとに作戦は展開され、遂にヌーの一頭を倒すことができた。その時、黒鬣のライオンが赤茶鬣の一頭をつれて悠然と現れた。

二頭は獲物の傍にやってくると当然のように雌たちの中へ割り込んだ。すると雌たちはまるで王様を迎える侍女たちのように、獲物から離れて席を譲った。

黒鬣はヌーの横にべったりと腰を下し早速食事にとりかかった。一度、赤茶鬣が近づいたとき彼は鼻に小皺を寄せて残忍に唸った。

その一喝で、赤茶鬣は耳を後方に倒して獲物の傍を離れた。しかし雌獣たちのように遠くには離れず、黒鬣の正面、獲物を挟んで二メートルほどのところに腹這いになって許される時の来るのを待った。

黒鬣は音を立てて肉を噛み裂き、がつがつと食った。赤茶鬣はよほど空腹だったのだろう、その唇から涎がスーッと糸を曳いて垂れた。彼は頭を上下させ、前肢で土を掻き、鼻声を出して〝食べさせてくれ〟と哀願した。だが黒鬣は低い唸りで応えるだけだった。（一九一頁）

「私」はこの時近寄って来ていたG夫人から、このボスライオンがハイエナのパー爺さんを殺した張本人であることを知らされて驚いた。

この場面での「私」の関心事の一つは、狩りをする際のライオンのコミュニケーションの方法であった。「私」の質問に答えてG夫人は、

ライオンたちは非常に表情が豊かですし、いろんな声を出します。感情や気分のすべて、例えば好奇心だとか、恐怖だとか、関心、心痛、怒りなどみんな表情に表わします。不機嫌なときにはライオンは鼻や額に皺を寄せ、短い間隔で歯をむき出しますし、本当に怒ったとなると耳を後にたおして眼を輝かせ大きく見開きます。口は半分開き、低い唸り声を発します。そして尾を左右に振ります。その尾が突然硬直して、すばやい動作で連続して二、三回、背中の線に対して直角にぐいッと上げたらこれは攻撃のサインです。（中略）

声について言うなら、仲間と接触するための囁きに似た低い唸り声もあれば、不安を感じたとき、怒りのときの唸り声もあり、攻撃の前兆としては咳込むような声を出します。時にはネコのようなニャーという声も出します。恋人を呼ぶ低い唸りもあります。

ですからこれらの表情、声などの使いわけで彼らの仲間どうしではかなり意志が伝わっていると思いますよ。（二〇三・二〇四頁）

と答えてくれた。更に、「私」の「擬人的な質問で羞しいんですけど……ライオン夫婦にも人間のような痴話喧嘩というものはあるんですか？」（二一三頁）という質問にも、「ありますとも……。人間も動物も――それが高等な動物なら、根本的には非常によく共通してるんです。ですから嫉妬もあれば、誘惑もあり、痴話喧嘩だってあるわけでしてね。尤もその表現が人間と共通したものかどうかはわかりませんけどね」（二一四頁）と話は広がっていくのであった。

二つ目の「私」の関心事は、ボスライオンの暴君ぶりであった。ここから発展して、「私」はG夫人からライオンのプライド（群れ）の構成、ライフ・サイクル（生活環）について多くの知識を得る。

G夫人はライオンのプライドについて、「動物心理学者たちはライオンのプライドに直線的な順位制が存在すると証言しています。プライド

の中の最も強い雄が、その群の代表者として他のすべてのメンバーより優位に立っているわけですが、プライドの中の一番弱い雄でも成獣である限り、すべての雌や仔獣よりは上位に在るのです。その点、ハイエナとはまったく逆です」（二〇三頁）と語っている。そのプライドがどのようにして出来るかを説明しているが、「私」はそれを次のように受けとめている。

「なるほど……やはり食と性とがプライドの形成に大きく作用するわけですね」

そう相槌を打ちながら私は人間も同じだと考えていた。食すなわち職である。性すなわち結婚である。われわれ人間の氏族構成も、職と婚姻に大きく作用されている。（二〇〇頁）

続けて、血族でない雌たちが結びついて一緒に生活する要因として、G夫人は子どもの存在をあげている。「つまり幼稚園や小学校に通っている子どもが仲良くなるとお母さんどうしのつき合いも深くなるというのと同じです。擬人的な言い方かもしれませんが血のつながりのない雌たちが友達になるのは、子どもを通じてお互いに気心が解り合えたからということでしょうね」（二〇〇頁）と語り、更に、「面白いことに雌ライオンは協力しあって、赤ン坊を育てます。だから空腹になった赤ン坊は自分の母親でなくとも、乳の出るライオンが居ればそこへ寄っていって貰い乳をして育つのですね。雌ライオンは誰の子でも舐めてやり、一緒に遊び、あたかも母親のように振舞うのです」（二一五頁）と述べている。共に、人間的視点からの考察といえよう。

次にライオンのライフ・サイクルについて、G夫人は次のように講義する。

● ライオンの縄張りは雌と雄とでは根本的な違いがあるのですね。雌ライオンにとってテリトリイは単なる狩猟場です。しかし雄ライオンのテリトリイは自分と交尾をする何頭かの雌を確保できる地域です。（二〇九・二一〇頁）

● ライオンは雌が獲物を獲り、雄はぶらぶらしていて雌の得た獲物を食べる。大変な横着者で、暴君のように言われていますがそうでもないのです。雄には雄の役目がちゃんとあるのです。つまりテリトリイを護るという役目です。それといま一つは繁殖で、そのプライドが衰弱しないようにするという役目です。（二一〇・二一一頁）

更に夫人の講義は、〈ライオンの子別れは大体出産二年後であり、雌はプライドに残ることを許されるが、雄は独立していく。そして力を貯えた後、ボスライオンに挑戦してそのテリトリイを奪おうとする。〉と続くが、絶えず人間になぞらえて、「一夫多妻制・独身者クラブ・武者修業・果たし合い・内閣の更迭」といった用語によって説明している。

夫人のライオンについての話題は尽きなかったが、なかでも共喰い（カニバリズム）の習性のあることには驚かされた。雄ライオンが戦って倒した相手の雄ライオンを食べることはよく知られているが、時には花嫁を、また仔獣を食べるともいう。雌にも数は多くないが、やはり共喰いはあるという。G夫人の目撃談をまじえてのこれらの話に、「私」は眠れぬままに一つの結論を得た。

一頭のボスが多数の雌を支配し、それぞれに子供を産ませたとしたら、かなりの赤ン坊が生れる。それらが全部満足に成長したとしたらアフリカの原野は忽ちにライオンだらけになってしまい、草食獣は絶滅するだろう。それをさせないためにはライオンの繁殖にブレーキが必要だ。そのブレーキとなるのが共喰い制度だろう。その制度こそ自然の神が与えたものかもしれない。神はライオンにも草食獣たちにも同じように生きる権利を与えられたのだ。自然界のバランスはそこで成り立っているのだ。（二一九・二二〇頁）

だが、G夫人はこの「私」の推論に対して、「もっとデータを集めて結論を出すべきだ。」との考えを示す。第四話においても、動物を人間と重ね合わせて考察しようとする手法は、これまでの章と同様に一貫しているが、この共喰いの叙述においては、作者はそうした視点を直接には示していない。しかし、読者としては今までの思考の発展から、共喰いの残滓を人間の進化の過程に認めようとする者もあるであろうし、逆に進化の結果放擲したもの、更にはそこから新しく持ち得たものに目を向けていく者もあるだろう。

第二の目撃場面は、黒鬣のボスライオン、ブラック・ジョーの最期のシーンである。二年ぶりに訪れた「私」は、運転手のジョーンから、ブラック・ジョーが三銃士の挑戦に敗れて、テリトリイの外に逃れて傷ついた身を休めていることを聞いた。

夫を追われ、わが子が殺されても新しいボスに従うプライドの雌たちの様子を、ジョーンは「自分たちの運命だと諦めているのか……」（二三二頁）といい、「私」は「戦国時代の夫人たちのようだな」（二三二頁）と思う。更に「私」は、雌たちは歳をとっても最後まで助け合うが、雄に対してはその手を差しのべないのを、「絶対服従を強いられた雌ライオンたちの雄に対する唯一の反抗なのだ。」（二三七頁）とその思いを述べる。こうして妻たちや仲間に見捨てられたブラック・ジョーを、ジョーンは「精神的なショックが大きいから体力以上に気力の方が参っている。」（二三二・二三三頁）といって立ち直る可能性の少ないことを示唆する。

ブラック・ジョーは崖下の繁みにひそんでいた。最初に彼を見た時、衰弱しきったその姿はまさに老醜という言葉がぴったりあてはまった。「私」は、英雄の末路とはこんなものかとつくづく思った。二日目、ブラック・ジョーの姿を求めて、「私」たちは湖の方へ車を走らせていた。たとえ腐敗した屍でもいいから、抱え込んで食っていてくれればいいがとの思いも虚しく、死んでいるブラック・ジョーを発見した。

キラキラと輝く湖面を背景として、ブラック・ジョーは伏せていた。それはライオンたちが狩のときによくやる姿勢だった。

私にはジョーが寝てるとしか思えなかった。

だが既に彼の周囲にはハゲワシの数羽が舞い降りて居り、空にも十数羽が円を描いていた。その光景はまぎれもなくジョーの終焉を告げているものと言えた。（二三六頁）

ブラック・ジョーの下顎は砕けていた。王者の時の栄光が忘れられなくてシマウマに襲いかかり、やられたものらしい。茫然とブラック・ジョーの死体を見下ろしている「私」の肩を、ジョーンがそっとたたいた。

ふり返ると彼は黙って眼で知らせた。

湖の波がひたひたと押し寄せている辺り、約三百メートルほど向うにライオンの一族の姿が見えた。水を飲みに来たのだろう。

双眼鏡で眺めると一頭の巨大な雄と三頭の雌、それに幼獣だった。

もしかしたら彼らはブラック・ジョーの孫たちであるかもしれない。

その雄は、まだ若くて堂々としていた。だが私には次第に弱ってゆくであろうその雄の将来の運命が想像できた。彼が軽蔑しきっていたハイエナやリカオンがやがては彼をとり囲み、咬みつき、ついには息の根を止めてしまうだろう。

そうでなかったとしたらレンジャーの銃が、老勇士の苦悩をとり除いてくれるかもしれない。

だが、太陽はいまのようにチカチカと輝き、湖の水はヒタヒタと押し寄せていることだろう。そして何も知らずにここへやってきた観光客たちは声を放って言うだろう。「すばらしいわぁ……これが大自然なのね……」（二三七・二三八頁）

最終場面の描写である。黒鬣のボスライオン、ブラック・ジョーの物語はこれで完結するわけであるが、まさに人間の姿を彷彿とさせるものがある。動物と人間を連続線上でとらえようとしてきた作者の手法もここで完結を見る訳である。その残忍さに恐怖の思いすら抱いた「私」であったが、今はその死を愛情をもって見守っている。それはまた作者の心でもあったであろう。作者の目は、「盛者必衰」という大自然の掟そのものをも見つめ、そのきびしさの中を生きるあらゆる動物にも注がれている。

## ㈤ まとめの考察

この作品を貫いている作者の表現意図は、サバンナに生きる動物たちの本当の姿を明らかにしたい点にある。なかでも、残骸あさりとして悪名の高いハイエナを第一話・第三話において取り上げ、「ブチハイエナの主食とするところは、自分らが捕殺した生きのいい肉であることを私はハイエナの名誉のために訴えたい」（第三話）と「私」をして言わしめているあたりには、正義派らしい作者の心意気を感じる。ハイエナの対極に位置しているのがライオンである。第三話・第四話において登場してくるが、「百獣の王」という名声の陰に存する真実の姿を作者は追求している。ハイエナ・ライオンのほか、象・ヌー・シマウマなども登場してくるが、作者はまず、それらの動物の種としての特性に目を向けている。社会集団の構成の仕方、子育ての仕組み等にそれが顕著である。更に作者は、集団を構成する個の特性を描き出すことにも力点を置いている。ハイエナのパー爺さんなどがそれである。

動物たちの本当の姿を追求するにあたって、作者は動物と人間とを連続線上においてとらえようとしている。動物を通して人間の持つ動物的性質を明らかにしたり、逆に動物の中に人間性の萌芽を見出したりしていることは一貫して考察してきた通りである。それが、人間は動物から進化して生まれたものであるという認識を基盤に据えていることも、しばしば指摘してきたところである。こうした作者の追求に誘発されて、人間を種としての「ヒト」として認識する読者もいるであろうし、逆に人間が動物から進化した結果持ち得たもの、人間を人間たらしめているものに目を向ける読者も多いであろう。まさに、動物文学は人間を照射するものであるということになる。しかし、この作品においては、作者の関心は人間よりも動物にあることは言うまでもない。作者は動物と人間との類似性を絶えず指摘することによって、動物の心理や行動、生理や生態への共感を期待しているのではなかろうか。野生動物の保護、野生動物との共生への作者の強い願望を感じるのである。

ここで、紙幅の関係で触れ得なかったことを一つだけ取り上げたい。ヌーを例にあげるならば、ハイエナに囲まれたわが子を救うために母親は懸命に戦うが、もう駄目だと思った時には、わが子を捨ててさっさと群れの中に立ち帰るという。（第二話）母体は完成された出産の担い手であり、これを保つことは生のモラルなのである。その〝流行出産〟も個体を犠牲にして種が生きのびるための仕組みだという。（第三話）ライオンについていうならば、母親の子捨て・子殺しは早く出産期を迎えるための本能だとし、ボスの交替劇も強い血を導入するための仕組みだとする。（第四話）これらは挿話的に語られているにすぎないが、この問題は戸川の先行作品に幾度か取り上げられており、なかでも、「群」（昭50・2）では作品のテーマとなっている。種族保持の本能のままに毎日を懸命に生きる動物たちの姿は、作者の動物観の根底にあったと見てよいであろう。そして、それは当然のことながら人間にも重なっていくことになる。

ところで作者は、〈動物学で追究している問題をテーマにした動物文

学を生みだしていけば、ロンドンやシートンの古典をある面では超えることが可能なのではないだろうか。〉と考えているという。[注5] そういった視点から見ると、「動物に人間のような情緒が存在するか」「動物間のコミュニケーションの方法は」といった課題を取り上げたこの作品は、新しい動物文学を模索する戸川の一つの試みであったのではなかろうか。

最後にこの作品において、作者の目は動物にとどまらず、それを取りまく人間にも及んでいることを指摘しておきたい。カンバ族の運転手ムヒンデの見識・勇気は、第二話において共感をもって語られている。又、マサイ族の運転手ジョーンの有能ぶりは全編を通して窺われ、作者のマサイ贔屓をのぞき見する思いである。これらアフリカ人に対する戸川の愛は、他の作品においても共通しており、「人喰鉄道」の延長線上に位置づけることができよう。

## 四　おわりに

戸川幸夫は、アフリカを舞台とした多くの作品を書くことによって、人々の関心をアフリカに向けさせた。戸川がアフリカを通して表現しようとしたものは何であったのか。それは前述したマービン・カーウィ氏のいう、アフリカの大地に生きる動物と人間への「大きな愛」であった。なかでも、動物への愛はその中核をなしている。戸川は動物たちへの理解・共感を求めて書き続けている。野生動物の保護、野生動物との共生は戸川の夢であり、願望であったろう。そしてそれは、地球規模の今日的課題でもある。

戸川の創作活動の原動力は、見聞した野生動物の保護地区への感動であったろう。戸川は一九六六年（昭41）、六七年（昭42）の二度にわたって、ケニア、ウガンダ、タンザニアの保護地区を訪れた感想を、「これらの野獣をよくここまで保護してきたものだと感嘆させられる。（中略）アフリカが今日の姿を温存してゆく限りにおいては、いずれ世界の故郷として浮き彫りされるときがくるに違いない。（中略）東アフリカの野獣たちは――当の野獣たちはどう感じているか知らないが――人間の友人としてその存在が必要になりつつある。[注6]」と述べている。アフリカの自然を原始・野生への憧れを満たし、人間を照射し、文明の行方を黙示するところとして位置づけているといえよう。

作品の中においても、「動物たちの自立にほんの少し手を貸すだけ」という運営の原則にのっとっての保護地区の素晴しさがしばしば語られているが、観光化された状況に対する不満が全くないでもない。「サバンナに生きる」第四話最終場面での観光客の描写にもそれが窺えるし、第二話における、ロッジ近くの人慣れたバブーンに対して、人を寄せつけぬバブーンたちに感動している辺りにもそれが読み取れる。作者自身の言葉としても、紀行文「けものの国へ」（昭43・11）の中において、観光化されていない地区への憧れがしばしば述べられている。又、作者は、〈多くのライオンやその他の動物が人間の保護を受けたことでどう変化し、どう堕落したか。〉を今後書きたいものの一つとして挙げている。[注7] 自然の生態系が観光化されることによって変化していく状況にも、作者は目を向けているといえよう。

戸川はかつて、「高安犬物語」（昭29・12）以来一連の動物小説を書き続けてきたのはなぜかという問いに答える形で、「動物が好きだからだ、というよりも、狭い日本国土の中で、人間に次第に追いつめられて、滅亡しつつある野性の動物たちに限りない愛着を覚えるからである。[注8]」と述べている。滅びゆく動物を求めて日本列島を北から南へと旅した戸川が、海外へと足を延ばしていったのは必然のことであった。失われゆくものへの哀惜を書き綴ってきた戸川であったが、一連のアフリカものに

おいては、失ってはならないとする強い意志を感じるのである。

## 注および引用文献

〈本文の引用について〉

・「人喰鉄道」は『戸川幸夫動物文学全集』2（講談社、昭51・6）によった。

・「サバンナに生きる」は『サバンナに生きる』（新潮社、昭59・1）によった。

ともに、読みがなは特殊なものを除いて省略した。


（注1）『けものの国へ』毎日新聞社、昭43・11
（『戸川幸夫動物文学全集』14、一〇九頁）

（注2）同右書
（『戸川幸夫動物文学全集』14、一〇六頁）

（注3）読売新聞（夕刊）に「動物風土記第三話」として連載。昭35・11・22～昭36・7・15

（注4）第三話の下敷きとなっている「笑う奴」（昭49・10）においては、同様な場面で雄たちの求愛行動を雌の性欲を次第に高めていくものとしてとらえているが、ここではそういった叙述は全く見られない。

（注5）『戸川幸夫動物文学全集』12、三三三頁（尾崎秀樹　解説）

（注6）『動物のアフリカ』（講談社、昭42・11）五・六頁

（注7）『戸川幸夫動物文学全集』12、三三三頁（尾崎秀樹　解説）

（注8）朝日新聞「わが小説」欄（昭37・2・7）


（平成元年十月十一日受理）